

スリランカの原生植物を訪ねて

長澤 哲哉

花葉会恒例の第24回海外園芸事情調査の旅は、2013年9月7日から8日間の日程で始まった。

目的地は紅茶で有名な熱帯の島スリランカ。参加者は関東各地から12名、北海道、長野、富山、静岡、京都、高知、そしてカリフォルニアから10名の22名、添乗員の青木氏と総勢23名が成田に集結し、13:20スリランカ航空の直行便で一路コロomboに飛び立った。

時差は-3.5時間、9時間半のフライトで20:00コロomboのバンダラナイケ空港に着き、旅を共にする専用バスと日本語の達者な現地ガイドのローハナ氏の出迎えを受け、ホテルに向かった。夜の外気は意外に涼しかった。

9月8日(日)

7:00 専用バスで島の中央部のシーギリアに向け5時間の予定で出発。道中バスから見える景色は熱帯の美しい花をつけた常緑樹木が圧倒的に多く、ココヤシ畑やチークの並木も処々見えた。

昼食後、古代都市の樹林の上に突き出した高さ180mの巨大な絶壁の岩山、1982年ユネスコの世界遺産に登録されたシーギリア・ロックの登頂に挑んだ。1600余段の急勾配の階段が体力を奪うが、中腹には美女のフレスコ画が、頂上には王宮の遺跡とすばらしい眺望が待っていた。

岩山から降りた後、バスで南下し、高い山に囲まれた標高300m位の盆地、文化の中心ともいわれる都市キャンディへ向かった。途中道路わきに火炎木とゴールデンシャワーの大木がそれぞれ赤と黄色の花を満開に咲かせていたのでバスを一時停車してもらい、写真撮影タイムとなった。休憩に立ち寄ったスパイスガーデンでは、数えきれない種類の香辛料の展示に触れ、この国やアジア諸国で独自の配合が食事の特色や豊かさの素になっていることに思い至った。

初日にしてややハードなコースを終え、ホテルでひと息つき、明日の早朝出発に備えて休んだ。

9月9日(月)

7:15 出発、一路ペラデニア植物園へ。

ペラデニア植物園はキャンディの区域内にあり、英国領時代の1821年設立された。標高472m、年間雨天日161日、総雨量2,286mm、年平均気温25℃(1~3月では23℃~14℃)の自然条件で、総面積5.6km²の広大な敷地に147科4,500種の植物が植栽されている。年間140万人が訪れ、内20万人が外国人、20万人が学校の生徒とのことである。世界で最も伝統的な植物園として認められ、南アジアでは最も素晴らしい植物園といわれ、世界中の著名人も訪れて記念植樹が行われた一画があり、今上天皇の明仁さまが皇太子の時や三笠宮、岸首相などが植樹された木もある。

8時頃植物園に着くと園長の出迎えを受け、研修室で早速園の概要の説明をしていただいた。

本園の目的と活動状況は、

- ・スリランカの植物多様性を保護する、
- ・園芸業に役立つプログラム作りと企画・専門家の育成(3か月コース・1年コース・2年ディプロマコース等の研修実施)、
- ・花卉産業の発展に役立つ研究(花卉園芸、薬用植物の科学的研究等)、
- ・高レベルの植物園業務運営、
- ・新規植物園の建設と準備(2016年までに10か所目標の内、今年11月に4か所目完成予定)、



9/9 キャンディの仏歯寺の中で捧げられた睡蓮の花。紫の花は *Nimphaea nouchali* で国花



9/9 ペラデニア植物園の大王松並木で園長とともに全員

・スリランカの植物保護のための技術アドバイス等、多岐にわたる。

スリランカでは農林省の一部門として植物園局があり、植物園のはたらきは重要視されている。

見学の最初は、園長の先導で一般の人は入場できない園内にある国立標本館に特別に案内された。1821年スタートからの148,000の標本が保管され、整然と冊子に綴じられ、棚に並べられていて、その一部を見せていただいた。その中には200年前の標本や、すでに開拓により絶滅した種の標本もあり、保存状態の良い資料を一同交代で見せていただいた。

引き続き園内を歩き、竹類、しだ類、ジャワビンロウヤシ、ダイオウヤシ、キャベツヤシ等、それぞれのエリアに区分けされたヤシ類、学生実習園、南洋杉類、芭蕉類、ゴムの木類、記念植樹園、一年草多年草類、スパイスガーデン等々のエリアを回り説明を受けた。

広い園内はリスや鳥など野生の動物も見られ、歴史を感じさせる大木巨木がゆったりした間隔で配置され、気持ちの良い芝生の空間と歩きやすい園路は、さすがロイヤルの称号付きの公園としても一流だと感じた。新婚さんも見かけ、子供たちも楽しげで、住民の身近



9/9 仏歯寺境内の *Mesuna ferrea* オトギリソウ科。国の花

で多目的に利用されている様子を見ると、入園者の多さも納得できた。コマースソングでお馴染みの巨木の初代を務めた木も健在で、ますます大きく枝を広げていた。一方植物園としても整っていた。ラベルもしっかりつけられ、色分けされていて、黄色は有毒種、赤は固有種、緑は南アジア原産種、黒はその他の外来種と分かりやすい。学名科名と原産地が表記され、由来等の解説は白い大きめの立札に英語とシンハラ語で書かれていた。

昼食後、世界歴史遺産の『仏歯寺』と周辺の植物を見学した。仏歯寺では宗教的理由により入口だけは男女別になっていた。参道には色とりどりの大輪の睡蓮の切り花を山積みにして売っている露店が並び、参拝者が買って寺院に入り、参拝する際線香ではなく台の上にスイレンの花を置いてお参りしていた。中でも赤紫の花 *Nymphaea nouchali* は国の花です。

境内にはオトギリソウ科の *Mesua ferrea* の15m位の木が径8cm程で白い4弁のお茶の花を大きくしたような形の花を沢山咲かせていた。この木が地元ではクルシアと呼ばれスリランカの国樹だった。

キャンディの町に戻る途中、マーケットに立ち寄った。そこには日常の食事のあらゆる材料、穀類、野菜、果実、魚、肉、調味料、香辛料、その他諸々が、何十軒も小さく区画された店の台の上に隣の商品との境も区別できないほど山積みされ量り売りされていた。生鮮品は夕刻になると殆ど売れてしまうとのことだ。

ホテルに戻っての夕食ではハプニングがあり、パースデーケーキが差し入れられた。ツアー団長の鈴木司さんの何回目かの、自称60歳の誕生日を一同でお祝した。

9月10日(火)

早起きをして、7:30 標高差1,500mほど上がったヌ



9/10 ハクガラ植物園にて。Exacum trinervium 固有種

ワラエリヤに向け出発した。1,000m を越えたあたりから道の両側の斜面にアッサム種の紅茶畑がぼつりぼつりと見え始め、さらに霧か雲の中を登るといちめんの茶園に囲まれていて、所々で数人の集団で茶葉を摘んでいる姿も見えた。良質の茶葉が採れる環境のようだ。茶園の中にユーカリの大木が目につく。日除けのためなのだろうか。所々にニンジン、レタス、ネギ、カボチャ、ブロッコリーなどの野菜畑も見えた。途中マックウッズ・ティーセンターで紅茶の製造工場に寄り、機械や製造工程、茶葉の種類を見学した。この辺りは紅茶の産地であり主要な集散地でもある。売店ではブレンドしていない地元産の紅茶を入手できた。

午後、一段と高地 1,745m の国立ハクガラ植物園に着いた。この植物園は 1861 年設立され、初めはマラリヤの葉キニーネ林の実験農場として始まったが、衛生状態改善により需要が減り、28ha の面積を有する植物園に改園された。この辺りは過去の最低気温は 3℃、年平均気温 15℃、5～8 月は南西風、10～12 月は北東風のモンスーン気候の亜熱帯気候の地で、意外に涼しく、イギリス植民地時代避暑のための別荘地だった名残の建物が多く見られた。

雨が降ったり止んだりの中、園長の案内で広大な園内を見学した。

緩やかな斜面の道をたどると美しい草花のボーダー花壇が続き、途中で野生の猿に出会ったり、クリビアなどの球根園、小灌木の数々、シダ類、ロックガーデン、樹木園では蔓性種、モクマオウなどの針葉樹、ユーカリやカリステモン、アカシア類など外来種に区画され植栽されていた。散策にも適した植物園で、珍しい原種に近い花の写真も撮れた。

宿泊したホテルは、元イギリス人のクラブハウスだっ

たところで、未だに格式を保っている。19 時以後ディナーの時はネクタイと上着を着用し、靴もスニーカーでは食堂に入場できない。アメリカ流に慣れている者にはいささか窮屈な感じもしたが、よい体験になった。夜は冷えるので食堂では暖炉の薪に火がつけられ、食事後部屋に戻ると暖炉の前で電気ストーブがついていた。おまけにベッドの中には湯たんぽがセットされていた。サービス精神はなかなかである。朝、外気温は 15℃であった。

9 月 11 日 (水)

この日の目的地はヌワラエリヤのホートンプレインズ国立公園である。ここは 2010 年 8 月世界自然遺産に登録された。公園の標高は 2,000～2,300m で総面積 3,157ha の内 2,143ha が雲霧林、665ha が草原、170ha が湿地である。スリランカの顕花植物 3,500 種の 50% 以上がここで見られ、83 科 437 種、内 112 種が固有種である。

固有種の内訳は草本のイネ科 62 種、キク科 43 種の内 18 種、カヤツリグサ科 28 種の内 5 種、木本のクスノキ科 10 種全部、ノボタン科 12 種の内 9 種、シソ科 16 種の内 8 種、アカネ科 12 種の内 1 種 (青木氏資料より)。

7:30 各自ホテルのお弁当を受け取り、狭い山道もあるので四駆のランドクルーザーなど 5 台に 5～6 人ずつ分乗し、ホートンプレインズ国立公園に向けて出発した。先頭車には山の専門ガイド、現地ガイドのローハナ氏、添乗の青木氏、それにハクガラ植物園の園長まで同行して下さり、豪華な体制での山歩きとなった。

途中から霧なのか雲の中なのか何も見えなくなり、舗装も穴だらけの道を揺すられながらも 2 時間足らずで国立公園の入口に着いた。

公園管理事務所の職員が一人一人の持ち物の点検に来た。自然保護区なので自然分解しないプラスチックでゴミになるものは持ち込みが禁止され、弁当の包装も紙であった。公園入口から一周約 10km のコースを 6 時間の予定で思い思いに観察し、写真を撮ったりガイドして下さった園長さんなどに質問したりしながら見て回った。周りが開けているところ、薄暗い茂みの間、道の中央が水流でえぐられて水が流れていたり、階段状の木の根を頼りに登ったり下ったり。誰かが見つけた珍しい植物の撮影の順番を待ったり、立ったままお弁当を食べたり、急に雨が降り慌てて傘をさしたり。ワールドエンドと呼ばれる崖の淵から 1,000m 下を覗いて見たり、エキザカム、モウセンゴケ、3 弁のインパ



9/11 ホートンブレインズ国立公園にて。 *Impatiens* sp.

チエンスなど固有種と思われる植物たちにも出会えて一同楽しい一日を過ごし、4時過ぎに公園を後にして、6時頃無事ホテルに着いた。

9月12日(木)

8:30 ホテル発。ラトナプーラに向けて出発した。朝からの雨の中、ホテルから数分の果物の露天が並んでいるところを覗いてみた。どこで生産されているのかわからないが、確かに果物の町と言われているとおりマンゴー、モンキーバナナ、パパイヤ、ココヤシほか沢山の種類の熱帯の果物のほか、りんご、オレンジなどが山積みされていた。車窓から見た野菜畑も1,000m以上の高地で多く見られた。

途中バスの中でも冷えてきて暖房が入る時があった。外は限りなく茶園が広がっていた。低地ではどこも二期作の稲刈りは済んでいたのに、この辺は涼しいせい、田では稲穂が垂れてまだ刈り取り前だった。

昼食をとったハプターレでは多人種が住んでいて、美しいモスクが見られた。ラトナプーラに近づくと田や畑が掘り返されている箇所が目につくようになった。ルビー、サファイヤ、猫目石などダイヤ以外の原石が採掘されているとのこと、運がよければ大金が得られるようだ。

町の宝石博物館に案内され、大小様々な沢山の種類の宝石の原石を見た。ここは紅茶だけでなく宝石でも世界で有数の産地とのことだ。

9月13日(金)

4時起床し、5時30分まだ暗い早朝バスで出発、最後の視察地世界自然遺産のシンハラジャ森林保護区へ向かった。シンハラジャ森林保護区は東西21km、南北

7km、年間雨量3,500～5,000mmの亜熱帯雨林で、樹高35～40mの高い林の中にランなどの固有種の60%が見られるという。

6時過ぎにようやく明るくなり、沿道のところどころに真っ白な制服を着た男女の小中学生が数人ずつ固まって通学のバスを待っている姿が、かなりの山道に入った家がまばらな所でも8時ころまで続いた。教育の行き渡っている姿が頼もしかった。

8時過ぎから、今日も同行してくださったハクガラ植物園の園長とシンハラジャ森林保護区のレンジャー2人の案内で約3時間ほど森林の見学をした。薬用などの有用な草や木が多数有り、園長さんの丁寧な説明を受けた。見学最後の20分くらいに急に激しいスコールに見舞われ、先へは進めずスタート地点に戻った。

あらかじめ雨具を着て傘も持っていたが、とてもしのげる状態ではなく本場の雨の凄さを体験した。また、ヒルが沢山いると聞いていたので、できる限りの服装や薬品などで予防対策をしておいたが、3cmほどの忍者の如きヒルがいつの間にか取り付いて、痛くも痒くもないのでほとんど気付かぬ間に献血させられた人が何人かいた。私も帰宅して下着を脱いで洗濯かごに入れるとき初めて大きな血痕があるのに気づいた。現地で現行犯に対し特効薬と言われた天然素材入りの軟膏を、吸い付いているヒルのそばの皮膚につけた瞬間ポロっと落ちたのも目撃し、生活の経験と知恵から生まれた身近な物の確かさを知らされた。

昼食をレストランでとったが、出される飲み物はパイヤかパイナップルの生ジュースが多い。

12時にコロomboの空港に向けて出発した。午後は晴れていた。途中ハクガラ植物園の園長とお別れし、道路脇にネペンテスの大群落を見つけ、停車して写真に収めた。

7時半頃空港ホテルに着き、雨で濡れた衣類を荷造りして、夕食をすませ、8時45分には一週間ガイドを担当していただいたローハナ氏とお別れして、空港のチェックインをした。

23:50 成田直行便はバンダラナイケ空港を離陸し、9月14日(土)11:50 全員無事に成田空港に着き、花葉会平成25年度海外園芸事情調査の旅スリランカ編は終了した。

企画に携わり準備をして下さった団長の鈴木司氏はじめ、花葉会の各位、実施に当たり準備から添乗のお世話をして下さった博学な青木社長、現地でご支援くださった園長やガイドの方々に厚く御礼申し上げます。